

48 仲村渠マカトウ

昔、伊江島の東江^{あがりえ}という部落に仲村渠マカトウという美人がいた。ある年に、部落の行事をやらなければならない。この、祭りですね。やらなければならないといつて、踊りのなかなか達人な人を師匠に頼んでこなくちやいかんということで、伊平屋の松兼という非常に踊りの達人な先生がおるから、あれを頼んで来て、この部落民に舞踊を教えておつたと。行事をするためにね。

教えおつたその時に、仲村渠マカトウというのは、この伊平屋の松兼に惚れてしまつて、二人は恋仲になつてしまつたと。恋仲になつてしまつたので、伊平屋の松兼が自分の伊平屋に帰る時は、伊江島の海にある、マミクというなかなかおいしいものですね、これ。海草だけでも。これを持つて来てお土産に持たしたんですね。

持つて行つて、この妻子にもやつた。おいしいおい

しいと食べた。食べて、これを風の便りに伊平屋の松兼は仲村渠マカトウと恋仲になつておるらしいということを知った。

「こんにちは。こいつがおつたら大変だから、自分分は後、捨てられやせんか」という心配があつたんでしようね。それがこの伊平屋の松兼が首里に役目で、首里上りの時に、留守になつた、その時に、この家内は伊平屋から伊江島に訪ねて来て、その仲村渠マカトウの家まで行つて、

「自分は伊平屋の松兼の妹である。まあ、ここにこう踊り教えに来た時にいろいろお世話になりました。ありがとうございます。御礼にきました」ということを嘘ついで、それ言うたんです。で、

「おいしいものをいただきました。あれはおいしいからもう一ぺん、海に行つて取つてきましょう」と言つて、いつしよに連れて行つて。これはこの波打ち際でないところに、大波の打ち際じゃないと生えないらしいね。そこまで連れて行つて、

「ここからこれ、取りなさい」と、このマカトウがどんどんどんどんそれを取つておる最中に、これを押し

倒して、水に、大波の中へ押し込んだと。それで、死んでしまった。

それから今度、そのことがわかつて。今度また、伊平屋の松兼はあれが死んだということを風の便りで聞いたんでしようね。これもまた行つて、それもまた何か知らんけれども自分一人、小さい舟から行つたんだから。昔の人は小さい舟で自分で漕いで行きますわな。それもまた海で死んでしまった。二人ともね。

二人とも死んでしまったんで、これがこの、海に、宵々、夜長になるといふと、明かりがね、こつちからもこつちからも出てくる。こう、近づいては別れ、近づいては別れて。遺念火という。火がこの、伊平屋を渡る遺念火と。伊江島と伊平屋とのあい中に火が出るというようなことを聞かされたですね。

字糸満 田場天龍